

[論文]

小学校外国語活動を指導できる教員の育成に向けたシラバス作成

外国語活動に求められている指導力と学生アンケート調査からの考察

敬愛大学国際学部専任講師 敬愛大学国際学部非常勤講師 東京経済大学現代法学部准教授

佐藤 佳子・執行 智子・カレイラ 松崎 順子

1 はじめに：小学校外国語活動の現状と課題

公立小学校では、2011年度より教育課程に「外国語活動」が必修として位置づけられ、高学年では週1回（年間35単位時間）の授業が実施されている。文部科学省の学習指導要領には外国語活動の目標と教育内容が規定されており、小学校が目指すところは、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」（文科省2008a, p.7）こととしている。

各小学校では、文科省が規定する指導目標に基づいて、児童の実態に合ったカリキュラムを作成し、外国語活動の授業を実施していくことが求められている。しかしながら、多くの学校では、外国語活動の指導に関しては、学級担任を中心に行われているものの、文科省から配付されている *Hi, friends!* のみを順序よくするか、または業務委託しているALT（外国語指導助手）の会社に授業案を一任して実施している場合が多く、各小学校の児童の実態に合わせて外国語活動を作り上げているようには見受けられない。前者に関して、文科省指導要領（2008a）によれば、*Hi, friends!* は副教材であり、「学校や学級の実情に合わせて弾力的に扱うことが可能であることに留意する必要」（p.25）とあり、担任教員が児童の実態に合わせて *Hi, friends!* にバリエーションを加えて活動を組み立てるように作らなければならないのである。よって、*Hi, friends!* のみを順序良くすることで外国語活動を作るとは *Hi, friends!* 配付の本来の目的に沿っていない。このような実態では、2020年の教科化に向けて小学校外国語活動を進めていくことは難しい。

外国語活動において小学校教員に求められている資質や能力とは、主に、子どもの発達段階に応じて、それぞれの興味や関心に合った内容の活動を用意することができること、他教科の学習内容との関連で活動を設定することができること、子どもに寄り添いながら授業を進められることが挙げられる（Sharpe 2001）。このことを踏まえると、大学における小学校教員課程に求められているのは、文科省の指導目標に基づいて、児童の実態に合わせた到達目標を決めて、クリエイティブな授業を作ることができる教員を養成することである。そのために大学は、外国語活動を組み立てることのできる小学校教員を養成するためのカリキュラム開発をしなければならない。現在本学こども学科では「外国語活動」に対応する科目として、「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英

語指導法Ⅱ」の4種類の講座を開講している。4講座すべて必修科目であり、他大学の小学校外国語活動のための科目数に比べ大変豊富であるといえる。本学ではこれらの科目を有機的かつ効果的につなげ、受講学生が将来「外国語活動」を自律的に自校に合わせて作成し、また、授業を中心となって執り行えるような能力を養成しなければならない。

2 研究目的

文科省作成の『小学校外国語活動研修ガイドブック』には、外国語活動の指導者（学級担任）に求められる力を3つ挙げている。

- ①児童の発達段階を踏まえ、興味・関心を抱くような学習内容と活動を設定できること。
- ②積極的にコミュニケーションを図ろうという気持ちを起こさせることができること。
- ③英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができること。

（文科省 2009、p. 17）

外国語活動を進めていくために学級担任の役割は非常に重要である。①②③のほかに、文科省は外国語活動の指導者に欠かせない資質として、学級担任の役割を主に「設計」「実施」「評価」の3つの段階に分けて言及している。

〈設計〉

- ①児童の興味・関心に基づいて指導計画を立て、指導内容や活動を考える。
- ②ALT等と協力して教材や教具を準備する。

〈実施〉

- ③ALT等や児童に指示を出し、授業を把握し、進行する。
- ④児童と一緒に活動に参加し、外国語を使うことに積極的な姿勢を見せる。
- ⑤児童のつまずきに気付き、適切な支援をする。

〈評価〉

- ⑥主に、児童の積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする関心・意欲・態度や国際理解の面についても評価する。

（文科省 2009、p. 17）

「学級担任は、児童の実態を把握しているという観点から、事前に活動を設定し、実際の指導では、児童の反応を見ながら活動を進行し、主に児童の外国語を使おうとする態度面に関して観察・評価し、次回の学習につなげる役割を担うことになる」（文科省 2009、p. 17）。

さらに、外国語活動の指導者に求められる具体的な資質や指導力をまとめると、文科省が言及するように、次の4点が挙げられる。

- ①児童の生活、興味・関心についての深い理解
- ②児童の反応に臨機応変に対応できる能力
- ③言語や文化の指導に関する知識と技能
- ④カリキュラム開発力

④のカリキュラムについては、作成する際の留意点として「児童の生活、興味・関心をよく知り、児童の発達段階に合った活動、他教科で身に付けた知識・技能を理解し、言語や文化の指導に関する知識と技能とを備えることが必要」（文科省 2009、p. 19）であることが指摘されている。この理由として「外国語活動は、外国語のスキル面の向上を主なねら

いとすることではなく、外国語を使った活動を通して、人とコミュニケーションを図る大切さや楽しさを体験し、国際理解を図ったり、さらに視野を広げたりすることをねらい」(文科省 2009, p. 19) としているためである。つまり、文科省が示す外国語活動の指導者に求められている力とは、学級担任がもっている力である。

Sharpe (2001) は、学級担任には英語学習を担っていく力が備わっていることを指摘する。Sharpe (2001) によれば、学級担任の特徴は児童の実態に合わせて授業計画を立てられ、小学校教育を専門としているのでカリキュラム全体の中に英語学習を統合していくことができる、全教科を担当しているので、英語を子どもの学校生活全体に組み入れることができる、一日中児童と一緒にいるので、深く豊かな関係を築くことができることを挙げている。つまり、外国語活動の作成や充実させるためには、担任に備わっている資質と能力が大切な役割を担っているといえる。

つまり、よき学級担任とは外国語活動の指導者としての資質や能力をすでにもっており、文科省が示すように、今後も指導者として求められているというのである。そのため、大学の教員養成においても、外国語活動における学級担任の役割を重視し、それを念頭に置いた教員養成をしなければならない。具体的には、外国語活動に関しては、英語運用能力、言語習得、子どもの発達段階、言語や文化、文学に関する知識、指導法の知識、実践力が必要である。外国語活動に必要な英語運用能力とともに指導に関わる専門的な知識の習得、文部科学省の『学習指導要領』を十分理解し、それを授業で実践する能力やパフォーマンス力であると言えよう。

本研究では、以上のような教員を育成するために、2014年度より見直しを開始した、「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」の4種類の講座の内容と各講座の効果的なあり方と有機的なつながり方を具体的に検討し、学生に役立つシラバス作成およびその実践を目的とする。

3 本研究

3.1 本研究の目的

本研究では、外国語活動を指導できる小学校教員を育成するために、2014年度より見直しを開始した、「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」の4種類の講座の内容と各講座の効果的なあり方と有機的なつながり方を具体的に検討し、学生に役立つシラバス作成およびその実践を目的とする。

3.2 参加者

本研究に参加した者は、「小学校英語Ⅰ」73名、「小学校英語Ⅱ」69名（「小学校英語Ⅰ」履修済）、「小学校英語指導法Ⅰ」116名（「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」履修済）、「小学校英語指導法Ⅱ」105名（「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」履修済）である。

3.3 敬愛大学における小学校外国語活動指導者養成科目：授業実践

3.3.1 「小学校英語Ⅰ」

本学こども学科では、2011年度より、外国語活動に対応する科目として「小学校英語Ⅰ」、「小学校英語Ⅱ」、「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」の4講座を開講している。

4講座すべてこども学科の必修科目である。「小学校英語Ⅰ」は1年次、「小学校英語Ⅱ」は2年次、「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」は3年次対象の科目である。各

科目の受講者は約50～70名で、各講座とも理論から実践という流れをとり、講義と体験型の両方の授業形態を取り入れている。「小学校英語Ⅰ」では主に外国語活動自体を体験する側として体感し、「小学校英語Ⅱ」では「小学校英語Ⅰ」の体験を踏まえて、外国語活動を実践する側として体感する。「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」では「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」で体得した知識や経験を生かし、学級担任として授業案を作成し、実践する。「小学校英語Ⅰ」の具体的な内容は、シラバス（表1）にあるように、小学校外国語活動に関する基礎的な知識、技能、指導法を学び、実際に活動（アクティビティ）を体験することを中心に行っている。学生によるアクティビティのプレゼンテーションを重視する。

【授業のねらいと到達目標】子どもの発達、特に言語発達を理解し、小学校外国語活動の基本的な知識や理論、指導方法を学び、小学校外国語教育についての在り方を考える。様々なアクティビティを体験し、小学校外国語活動を担当する教師として適切な指導技能を理解するとともに、学生自身の英語運用能力の向上を目指す。

本講座のシラバスは表1の通りである。

表1 2014年度 小学校英語Ⅰシラバス

第1回	オリエンテーション	授業の進め方、外国語学習（自分の体験から）、小学校英語について
第2回	小学校外国語活動について	概要（導入の背景、基本的な知識、目指すもの、MEXT指導要領、評価）
第3回	第二言語習得理論	母語の習得、外国語（第二言語）の習得
第4回	外国語指導方法およびClassroom English①	授業で使える英語表現
第5回	外国語指導方法およびClassroom English②	TPR, Communicative Language Teaching
第6回	Activities①	songs, chants
第7回	Activities②	games
第8回	Activities③	picture books
第9回	Activityの作成①	chants
第10回	Activityの作成②	games
第11回	Activityのプレゼンテーション	Activityの評価
第12回	<i>Hi, friends!</i> 考察	<i>Hi, friends!</i> にある activity の考察
第13回	授業計画について	レッスンプラン（通年の構成、単元シラバス）
第14回	教材について	ICTの活用、教材開発の仕方
第15回	まとめ	第1～14回の授業を振り返って

3.3.2 「小学校英語Ⅱ」

2年次が履修する「小学校英語Ⅱ」では、1年次に習得したアクティビティの知識や実践力を応用し、アクティビティとアクティビティのつなげ方を学びながら、一つの授業を作り上げていくための知識と技能の習得を目指す。3年次で履修する「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」の前に、アクティビティとその背景についての理解を深め、年間指導計画、カリキュラム作成、学習指導案作成と模擬授業等の実践へとつなげていくための準備をすることが目的である。

【授業のねらいと到達目標】この授業では、小学校外国語活動を担当する教師として適切な技能を、実践を通して、理解し深めていくことをねらいとする。今学期は、これまで学んできた一つひとつのActivityをレッスンプランにつなげていく作業を中心にグループで取り組む。Classroom Englishなどの英語運用能力の向上を目指す。

本講座のシラバスは表2の通りである。

表2 2014年度 小学校英語Ⅱシラバス

第1回	オリエンテーション	授業の進め方、外国語学習（自分の体験から）
第2回	小学校外国語活動について	現状（MEXT指導要領）と課題（評価）
第3回	第二言語習得理論	母語の習得、第二言語の習得
第4回	外国語指導方法およびClassroom English①	授業で使える英語表現、phonics
第5回	外国語指導方法およびClassroom English②	TPR, Communicative Language Teaching、phonics
第6回	Activities①	songs, chants
第7回	Activities②	games
第8回	Activities③	picture books
第9回	英語学習理論	input theory, interaction theory, output hypothesis
第10回	グループワーク①	chants, songs, games
第11回	グループワーク②	chants, songs
第12回	グループワーク③	chants, games
第13回	グループワーク④	picture books
第14回	グループワーク⑤	picture books, games
第15回	まとめ	第1～14回の授業を振り返って

3.3.3 「小学校英語指導法Ⅰ」

【授業のねらいと到達目標】 小学校外国語活動についての意義を考え、小学校教師として外国語活動を実践する能力を育成する。レッスンプランの作成、模擬授業形式の発表などの実践を通して、小学校教師として適切な指導技能の習得、教材研究、授業の進め方について理解を深める。学生自身の英語運用能力のさらなる強化にも力を入れる。本講座のシラバスは表3の通りである。

表3 2014年度 小学校英語指導法Ⅰシラバス

第1回	オリエンテーション	授業の進め方、外国語学習（自分の体験から）
第2回	小学校外国語活動について	現状（MEXT指導要領）と課題（評価）
第3回	外国語教授法および外国語学習①	communicative approach
第4回	外国語教授法および外国語学習②	Content-based, Task-based, MI, immersion
第5回	教材研究①	教材開発の仕方
第6回	教材研究②	ICTの活用
第7回	評価について	評価方法の実際
第8回	レッスンプラン作成①	プロジェクト作成①
第9回	レッスンプラン作成②	プロジェクト作成②
第10回	発表①	模擬授業①
第11回	発表②	模擬授業②
第12回	発表③	模擬授業③
第13回	発表④	模擬授業④
第14回	これからの小学校英語教育	今後の課題について、ディスカッション
第15回	まとめ	第1～14回の授業を振り返って

3.3.4 「小学校英語指導法Ⅱ」

【授業のねらいと到達目標】 小学校外国語活動についての意義を考え、小学校教師として外国語活動を実践する能力を育成する。レッスンプランの作成、模擬授業形式の発表などの実践を通して、小学校教師として適切な指導技能の習得、教材研究、授業の進め方について理解を深める。学生自身の英語運用能力のさらなる強化にも力を入れる。

本講座のシラバスは表4の通りである。

表4 2014年度 小学校英語指導法Ⅱシラバス

第1回	オリエンテーション	授業の進め方、外国語学習（自分の体験から）
第2回	小学校外国語活動について	現状（MEXT指導要領）と課題（評価）
第3回	外国語教授法および外国語学習①	communicative approach
第4回	外国語教授法および外国語学習②	Content-based, Task-based, MI, immersion
第5回	教材研究①	教材開発の仕方
第6回	教材研究②	ICTの活用
第7回	評価について	評価方法の実際
第8回	LESSONプラン作成①	プロジェクト作成①
第9回	LESSONプラン作成②	プロジェクト作成②
第10回	発表①	模擬授業①
第11回	発表②	模擬授業②
第12回	発表③	模擬授業③
第13回	発表④	模擬授業④
第14回	これからの小学校英語教育	今後の課題について、ディスカッション
第15回	まとめ	第1～14回の授業を振り返って

なお、2014年度「小学校英語指導法Ⅰ」および「小学校英語指導法Ⅱ」のシラバスは同じである。そのおもな理由としては昨年度までのシラバスには講義型の授業で体験的な、例えば模擬授業などを作成実施することがなかったためである。

3.4 方法

2014年度に新たに開始した「小学校英語Ⅰ」、「小学校英語Ⅱ」、「小学校英語指導法Ⅰ」、「小学校英語指導法Ⅱ」のシラバスの効果に関して検証するために、各科目の最終授業時にアンケート調査を行った。回収したアンケートを質的に分析した。

アンケートは以下1～5の項目であり、自由記述方式をとっている。

- 1) あなたがやりたいと思っている小学校の授業は（外国語）はどんなことですか。
- 2) （小学校外国語活動の授業で）必要な力とは何ですか。
- 3) どんな担任を目指しますか。
- 4) 授業でためになったことは何ですか。
- 5) 大学で養ってほしいことは何ですか。

3.5 結果

- 1) 「あなたがやりたいと思っている小学校の授業は（外国語）はどんなことですか」に関する参加者の返答は以下の通りである。

「小学校英語Ⅰ」

- Songsで楽しみながら英単語を日常にも取り入れられるぐらい親しみを持てる楽しい授業
- 第1に児童が英語に対して好感・親しみを持つことのできる授業がやりたいと考えている。具体的には、机で学習するものではなく、積極的にアクティビティを盛り込んだりし、体を動かしながら楽しみながら学習できるものを使い授業を進めていく。しかし、ただ楽しむだけのものではなく、ねらいをしっかりと確立させ、英語の学習となるものにしていきたい。さらには、日常の生活で子どもたちが進んで使えるもの（親しみのある）を使っていきたい。

- 中学校の授業で活かせる授業
- 学習意欲を高められる授業
- 外国語の授業のときには日本語を使わないようにしたい。より多く英語を聞いてほしい、わからなくてもジェスチャーや表情から読みとってコミュニケーション能力を高めてほしい
- 体を動かすような授業
- 文字ではなく、五感で感じる授業
- ゲームや音楽を使った子ども達の興味をひける授業。

「小学校英語Ⅱ」

- 普通に自分のことであったり話す活動は楽しいと思う。が、その一方で消極的な子であったり、と苦手としている子はあるだろう。その子たちでも参加できるようにする。
- うまくできなくてもいいから、とにかく生徒、先生問わず英語を積極的に使い、かつ楽しい授業。
- 子どもたちが「英語を積極的に話したい!」と思える授業です。
- 英語に慣れさせ、親しみをもち、興味をひくような授業を目指す。
- 様々な国の文化に触れる機会を設ける。
- 児童が興味を持てる授業
- 英語をたくさん聞いて、積極的なコミュニケーションができるように。ex) ALTとのTT

「小学校英語指導法Ⅰ」

- 児童が積極的に参加できるよう、アクティビティを中心とした活動や歌を取り入れた活動を行っていきたいと思いました。
- アクティビティやALT HRTのコミュニケーションを通して児童が楽しみながら英語に親しめるようにして、英語を好きになる授業をしたい。
- ゲームや歌、絵、体を使ったり、友達とコミュニケーションがとれるような授業。

「小学校英語指導法Ⅱ」

- 児童が体験的に英語に親しむ授業
- 英語を好きになれる授業
- 外国に興味を持たせるような工夫ができる授業
- 児童が主体的に取り組める授業。
- コミュニケーションが積極的にとれる授業。
- 失敗をおそれず、積極的に英語がとびかう授業。
- ALTに任せたりせず担任としてしっかり授業を行いたい
- 子どもたちがそれぞれの特技を生かして参加できるような授業にしたい。

2) 「(小学校外国語活動の授業で) 必要な力とは何ですか」に関する参加者の返答は以下の通りである。

「小学校英語Ⅰ」

- 自分が恥ずかしがらないコミュニケーション力がとても必要だと思います。
- 日本語とは英語の発音の仕方は全然ちがうので、正しい発音の仕方を身につけるのは大事だと思います。

- 英語の力とコミュニケーション能力だと思う
- 表現力
- ある程度の英語力
- 英語を楽しむ力
- 教員の英語力
- 授業を楽しくするための工夫する力
- 学年に合ったレベルで教える力だと思う。アクティビティの時などに先生自身も楽しみながら授業をする力も大切だと思った。

「小学校英語Ⅱ」

- 運営力と子どもたちの外国語活動に対する支援力だと思います。
- 児童やALT・JETと積極的にコミュニケーションを取ろうとする力。
- 自ら積極的に取り組む姿勢が大切だと考える。教師自ら積極的に参加し、学習を促すことが必要である。
- ALTや児童をいかに結びつけるか、担任が積極的なコミュニケーションを図らなければ授業は成立しない。

「小学校英語指導法Ⅰ」

- 児童をみきわめる力
- 学習指導案の設計力
- コミュニケーションをとろうという姿勢を見せたり、担任が楽しくなければ、みんな楽しくないと思うので、児童を英語の世界にひきこめるような力だと思います。
- 児童全体を把握し、盛り上げていく能力
- 児童の実態について理解すること
- 英語をうまく日常生活とリンクさせる力
- 基本的な英語の知識
- 児童の実態を把握し、コミュニケーションをとる力
- 児童には一人一人得意なこと不得意なことがあるため、MI理論のように、体を動かしたり、絵に描いたりしたりと、英語を様々なことに応用させることだと思う。

「小学校英語指導法Ⅱ」

- ALTの先生との対話力
- 教師の外国語活動への指導力だと思います。ALT・JETに頼るのではなく、あくまでも教師主体で行うことだと思います。
- 英語力
- コミュニケーション力
- 児童の実態を把握する力
- 柔軟に対応できる力
- 児童の理解力を十分理解した上で授業を組み立てる力。
- 児童の興味がわくような課題を用意する力
- 教師自身が積極的に活動に参加していくこと。
- 積極的な姿勢
- 児童からでてくるいろいろな反応に対して理解しながら授業を進める力。

- ・異文化についての理解力

3) 「どんな担任を目指しますか」に関する参加者の返答は以下の通りである。

「小学校英語Ⅰ」

- ・英語だけに関わらず、全て安定して教えられる担任
- ・子ども1人1人の特徴をとらえそれぞれに合わせた指導ができる担任
- ・児童とコミュニケーションのとれる担任
- ・児童の気持ちを理解できる担任。
- ・子どものレベルに応じて授業を展開できる先生。
- ・授業以外の学校生活でも英語をさりげなく学べるような環境や会話を作れる担任
- ・学年に合った授業を展開することで、わかりやすく教えられる教師。
- ・児童一人一人が笑顔で過ごせるクラスを作りたい。

「小学校英語Ⅱ」

- ・外国語活動を通して、子どもたちが英語を好きになってくれるような先生を目指す。
- ・児童の気持ちになって考えられる担任。
- ・児童生徒の目線にたつてものごとを考えるような教師
- ・幅広い視野で児童をみることができ、一人一人とコミュニケーションをとることができる担任。
- ・他の学科でもそうだが、子どもからの興味関心を引きだして、それに応えることができる能力を持つ先生。

「小学校英語指導法Ⅰ」

- ・45分という短い時間の中で、ALTと協力して児童の笑顔があふれ、心に残る授業をできる担任。
- ・児童一人一人に親身になって見ていく担任を目指す。
- ・児童と深くかかわり、外国語活動で児童の実態にあった授業ができる担任
- ・他の教員とは違って全部の科目を見れたり生活も見れるので上手に織り交ぜて取り入れられる人
- ・子ども（児童）のことをよく考えることのできる担任
- ・学校生活を通じて、児童の実態を把握し、それを元に適切な指導ができる担任。

「小学校英語指導法Ⅱ」

- ・授業を円滑にすすめるためにも日常的に児童とコミュニケーションを活発にとることを心がけたい。児童との信頼関係。
- ・教師自身が英語を楽しく学ぼうとする姿を子どもに見せることができる。
- ・子どもに英語が楽しいものだと思わせることができる教師。
- ・HRTはALTに比べ深く関わっているため、困っている時など普段との違いに気づくことができると思います。そのため、きめこまかいサポートをしていくことができたならと考えています。
- ・児童に寄りそえる担任。英語に関してはJETやALTに比べ知識が浅く発音やイントネーションなど細かい指導はできないので、活動に参加することをためらっている児童や、消極的な児童に声かけをしたりして、児童に寄りそえる担任になりたい。
- ・毎日児童と生活している担任だからこそ、1人1人の個性をしっかりと理解して、それ

に合った指導のしていける担任

- 児童と一緒に楽しく活動に取り組んでいける担任
 - 子どもたちと一緒に学んでいく担任になりたい。
 - 外国語も自分自身でしっかり教えられる HRT
 - 異文化コミュニケーションの意義深さも伝えていきたい
 - 毎日児童と生活している担任だからこそ、1人1人の個性をしっかりと理解して、それに合った指導のしていける担任
- 4) 「授業でためになったことは何ですか」に関する参加者の返答は以下の通りである。

「小学校英語Ⅰ」

- グループごとの授業がためになった。実際に前に出て、授業をすることは今まで機会がなかったため、うまくいかないことが多々あったが、ためになったと感じた。他のグループの発表を受けてグループごとの発表での適切な所、不適切な所がわかり、改善など先生がつけたしをしてくれることによって、自分の中でもなんだか理想の授業が見えてきたと思う。
- たくさんの人のアクティビティを見て、いろいろな方法を学んだ。また、授業を行う際や授業の準備段階で考えておかななくてはいけないことも思っていたよりもたくさんあることを学んだ。
- プレゼンテーションを考え、また、発表する事により、模擬授業のような感覚で将来のためになった。
- 実際に先生になって、英語の activity だったり、授業を体験できて、先生の授業の準備の大変さというのがよくわかった。授業ができたことはとてもためになった。

「小学校英語Ⅱ」

- 様々なアクティビティの紹介があった。すぐに実践できるものばかりで、実際に教室で使えそう。バラエティに富んでいた。
- アクティビティの紹介はそのまま使えるものが多くとても役立ちそう
- 小学生に英語を教えるといってもたくさんの教え方があり、周りの人の意見や発表を見ることによってたくさんの知識が得られた
- 絵本や自分でアクティビティをしたり、友だちのをみて英語（外国語活動）の考え方が広がった

「小学校英語指導法Ⅰ」

- 授業前のアクティビティ実際に考え、体験し、それを改善する活動がためになりました。様々な活動を知ることで豊かな指導ができると思います。
- 英語のアクティビティにも様々な種類があることや評価の方法が一番ためになりました。もっと知りたいなと思いました。
- 授業での絵本のとり扱い方や様々なアクティビティを学べてよかった。また、いろいろな人が作った模擬授業を受けることで自分の視野が広がった。
- 指導案を作成し、授業を行ったので、思い通りにならないことが多々あることがよくわかりました。教材研究に時間をかけなければすばらしい授業にはならないのだろうと思いました。

「小学校英語指導法Ⅱ」

- 英語の楽しさを改めて知った
- たくさんの模擬授業をうけて、新たな発見ができた
- ALT等との連携の大切さ
- ICTを効果的に使うことで、子どもたちをひきつけたり、わかりやすい説明等につながることを体験的に学んだ。
- 現場で使えるアクティビティについて知ることができた。
- 子どもの立場に立って授業を受けることができ、多角的に授業を考察できた。
- いくつかのアクティビティや模擬授業を行うことで、良いところや改善点などを見つけることができてよかった。
- *Hi, friends!* を使った授業では、児童の実態に即していない可能性がある一方で、児童の実態を把握し、アレンジしていく必要があることを学んだ。
- 英語のアクティビティがいろいろなものがあるということを知ることができたのと、同じ教材でもとり上げるものが異なったり、教具が異なると授業内容がガラリと変わることに
- 授業研究の仕方などわかった
- みんなの前で発表することができて、改善点など考えることができた
- ALTの先生に頼りすぎない授業の工夫を考える力がついたと思う
- アクティビティや模擬授業で実際に人の前に立って授業ができたことがとてもためになったし、自信にもつながりました。

5) 「大学で養ってほしいことは何ですか」に関する参加者の返答は以下の通りである。

「小学校英語Ⅰ」

- コミュニケーション能力だと思います。先生相手でも子ども相手でもコミュニケーションのとれる力が大切だと考えます。
- 英語力
- 教える力
- 経験を増やす。体験学習で実際に行われている所を見る
- 高校まででは体験できなかった事 ボランティアなど。また積極的にいろいろな事挑戦できる決断力を培ってほしい。
- 大学では実践的なものをたくさんやっていきたい。
- 英会話力

「小学校英語Ⅱ」

- 英語力
- コミュニケーション能力
- 実践力

「小学校英語指導法Ⅰ」

- 英語力
- 実践力
- コミュニケーション能力
- たくさんの英語授業のパターン

「小学校英語指導法Ⅱ」

- 英語力（ALTと授業を計画するときに話せるようになりたい）
- Classroom English
- 授業実習する機会をもっと多くってほしいと思いました。

以上、学生のアンケート調査結果である。ここには、学級担任として外国語活動に求められている力に関する記述内容がみられる。文科省が示すように、小学校外国語活動における指導者に求められている力とは学級担任が有する力であり、外国語活動を実施する際の大切な指導力である。

3.6 考察

本研究において見直したカリキュラムがどのように学生に影響しているかを見るために、アンケートを質的に分析した。その結果、文科省によると、特に以下①②に関する力は、学級担任が得意とする児童理解が深く関係しており、学生の回答の中に①②③に関する記述がみられる。

- ①児童の発達段階を踏まえ、興味・関心を抱くような学習内容と活動を設定できること。
 - ②積極的にコミュニケーションを図ろうという気持ちを起こさせることができること。
 - ③英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることができること（文科省 2009、p. 17）。
- 具体的な記述内容は以下の通りである。①②に関しては以下の記述に見られる：

「児童をみきわめる力」（項目2. 小学校英語指導法Ⅰ）

「児童の実態について理解すること」（2. 小学校英語指導法Ⅰ）

「児童の理解力を十分理解した上で授業を組み立てる力」（2. 小学校英語指導法Ⅱ）

「児童の興味がわくような課題を用意する力」（2. 小学校英語指導法Ⅱ）

「教師自身が積極的に活動に参加していくこと」（2. 小学校英語指導法Ⅱ）

「積極的な姿勢」（2. 小学校英語指導法Ⅱ）

「児童からでてくるいろいろな反応に対して理解しながら授業を進める力」（2. 小学校英語指導法Ⅱ）

「運営力と子どもたちの外国語活動に対する支援力だと思います」（2. 小学校英語Ⅱ）

「児童やALT・JETと積極的にコミュニケーションを取ろうとする力」（2. 小学校英語Ⅱ）

「自ら積極的に取り組む姿勢が大切だと考える。教師自ら積極的に参加し、学習を促すことが必要である」（2. 小学校英語Ⅱ）

「児童の気持ちになって考えられる担任」（3. 小学校英語Ⅱ）

「児童生徒の目線にたつものごとを考えるような教師」（項目2. 小学校英語Ⅱ）

「幅広い視野で児童をみることができ、一人一人とコミュニケーションをとることができる担任」（3. 小学校英語Ⅱ）

「他の学科でもそうだが、子どもからの興味関心を引きだして、それに応えることができる能力を持つ先生」（3. 小学校英語Ⅱ）

「子ども（児童）のことをよく考えることのできる担任」（3. 小学校英語Ⅱ）

「学校生活を通じて、児童の実態を把握し、それを元に適切な指導ができる担任」（3. 小学校英語指導法Ⅰ）

「子ども1人1人の特徴をとらえそれぞれに合わせた指導ができる担任」（3. 小学校英語

I)

主に③に関わる具体的な記述は以下の通りである：

「日本語とは英語の発音の仕方は全然ちがうので、正しい発音の仕方を身につけるのは大事だと思います」(2. 小学校英語Ⅰ)

「教員の英語力」(2. 小学校英語Ⅰ)

「基本的な英語の知識」(小学校英語指導法Ⅰ)

さらに、Sharpeが指摘する学級担任の特性を生かした授業づくりが可能であることと関連する記述も見られる：

「毎日児童と生活している担任だからこそ、1人1人の個性をしっかりと理解して、それに合った指導のしていける担任」(項目3. 小学校英語指導法Ⅱ)

「HRTはALTに比べ深く関わっているため、困っている時など普段との違いに気づくことができると思います。そのため、きめこまかいサポートをしていくことができたらと考えています」(項目3. 小学校英語指導法Ⅱ)

また、学生は授業を通して、外国語活動を進めていくためには学級担任の指導力が求められていることが身についたと考えられる記述も見られた：

「*Hi, friends!*を使った授業では、児童の実態に即していない可能性があるので、児童の実態を把握し、アレンジしていく必要があることを学んだ」(4. 小学校英語指導法Ⅱ)

「ALTの先生に頼りすぎない授業の工夫を考える力がついたと思う」(4. 小学校英語指導法Ⅱ)。

学生は授業を通して外国語活動における学級担任の役割について考え、将来小学校教員として必要とされている能力や資質に対する理解を深めることができたと思われる。少人数制の体験型の授業を行うことで、学生の学習意欲は高く、そして、教職への意識や動機に変容がみられる。英語への不安はあるが、特に毎回の学生によるアクティビティのプレゼンテーションからは学生の成長がうかがえる。本研究で開発したシラバスは開発途中であり、その効果、特に各講座の有機的なつながりについて今後検証し続けていきたい。

4 まとめ

「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」の4種類の講座のあり方とつながり方を具体的に検討し、学生に役立つシラバス作成およびその実践を行った。小学校外国語活動とその指導者のあり方について概観し、学級担任としてクリエイティブな授業を作るためにはアクティビティの知識だけでなく、アクティビティを実際に作り、それを実践する力が必要であると考え、授業シラバスを作成した。本稿では、2014年度は「小学校英語Ⅰ」「小学校英語Ⅱ」「小学校英語指導法Ⅰ」「小学校英語指導法Ⅱ」を受講した学生にアンケート(自由記述式)調査を実施し、シラバスの効果について考えた。将来小学校教員をめざす学生は学級担任として外国語活動を指導ための知識と技術、英語運用能力が不可欠であるが、シラバスにアクティビティを作成することを多く盛り込み、学生が主体的に参加できる授業を行うことで、小学校教員として求められている力が身についたといえる。学生が自信を持って実践できる場を増やすことが大学の教員養成に必要である。

(引用・参考文献)

- Sharpe, K. (2001), *Modern Foreign Language in the Primary School: The What, Why & How of Early MFL Teaching*. London: Kogan Page.
- 文部科学省 (2009) 『小学校外国語活動研修ガイドブック』、旺文社。
- 文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、東洋館出版社。
- 文部科学省 (2008b) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』、東洋館出版社。